

スケーター ワルツ

加賀乙彦



筑摩書房

スケーターワルツ

一九八七年二月一〇日 初版第一刷発行

著 者 加賀乙彦

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話二九一七六五二(営業)二九
四一六七二(編集) 郵便番号一
〇一一九一 振替東京六十四一二三
印刷 明和印刷 製本 積信堂

©加賀乙彦 一九八七年

Printed in Japan

ISBN4-480-80273-8

目次

第一部·····	五
第二部·····	一四五
第三部·····	二二五

装装
丁画

野
田
弘
志

スケータワルツ

この作品は、まったくのフィクション
で実在の人物やスケート・クラブをモ
デルにしたものではありません。

第一部

『箱庭療法』についての講義であった。57センチと72センチ角の木箱に砂を盛り、家や動物や怪獣のミニアチュアを配して箱庭を作る。それによって、患者の心理を診断し、治療にも役立てるといふ心理療法の手技である。

教授が講義をおこなったあと、実際の症例を先輩のひとりが報告した。箱庭療法によってどのようにノイローゼが治っていくかを、すこし唸るような重々しい声で彼は話した。

教授の紹介によると彼は卒業してから、精神病院で心理療法士として働いているという。教授の講義にはあくびを噛みこころしていた美也子は、彼、長坂夏彦が口を開き始めると急に耳を傾けた。症例の内容にひきつけられたのではない。長坂夏彦という男に関心があったからだ。心理学科の学生のあいだで、長坂夏彦は伝説上の人物だった。この大学の教授で、高名な民俗学者長坂博士の息子で大の秀才だった。卒業席次が一番だったため卒業式に文学部代表として卒業証書を受け取る役だったのが当日不意にその役をすっぱかし、一週間後、長野の山中で半

死半生で発見された。なんでも、卒業式に出席するのがいやで、春山スキーにでかけたところ、吹雪で道を迷ったのだという。その後、ハワイ大学に渡り、ポリネシア民族の心理学的研究をしていたが、ニューギニア高地民の調査をしているうち行方不明となり、二、三年してインドでヨガ行者をしているところを、たまたまそこへ民俗学的調査に行っていた父の長坂教授に発見され、日本に連れかえされた話は、一時期ジャーナリズムをにぎわした。

美也子が彼を見るのは初めてだった。そして意外に思った。教授が、彼を精神病院の心理療法士と紹介したのも意外だったが、もっと意外だったのは、名うての放浪者が肥り肉の大男だったことである。浅黒い、筋肉質の精悍な男を想像していたのがまるで違った。何だか白粉でも塗りとくったように生っ白い肌で、ふっくらと肥っていて、丸い顔に度の強い金縁眼鏡をかけていた。身長は一九〇以上はあり、体重は一〇〇キロを越えているのではなからうか。そういう体に似つかわしく、地を這うような低い声でゆっくりと喋り、しかも時々どもるのだった。この男がスキーをしたり、ニューギニア高地の奥へ歩み入ったり、ヨガ行者をしていたとは、ちよつと想像できない。

彼の症例報告がおわり質疑応答に入った。学生たちの質問に、彼は、口頭試問されたように、一々考えこみながら丁寧に答えていく。美也子が手をあげた。

「長坂先生は何年ぐらい精神病院に勤めてらっしゃるのですか」

本当は、「いつからそんなに肥ったのですか」と尋ねたかったのだが、さすが憚られた。と

ところで彼女の質問に強い反応が返ってきて、彼は見る見る頬を朱に染めて汗を吹きだし、しかもどもどもだった。

「ぼくは先生じゃないです……それから、精神病院には勤めてるのではなくて、この症例を診るためにだけ行ってるんです」

「それでは、もう一つ質問していいですか。長坂さんは、この頃、民俗学的心理学的調査をなさってますか」

「いや、それも全然……ぼくは今……その自閉症でして、まったく籠りっぱなしなんです」

なぜ彼が赤面したのか不可解なまま、美也子は質問を打ち切った。しかし自分が彼を恥ずかしめた気がして胸が痛んだ。講義がおわるとすぐ彼の前に飛びだしたのはそのためだった。

「さっきは妙な質問してすみません」

「いいえ」と両手で空気を押えつけるようにして言った彼の眼鏡は汗で曇っていた。そして汗の臭いがした。美也子は間が悪くなって、一礼すると彼を離れた。

日が落ちたばかりで空に白い明るみが残っていた。駅までまっすぐ行くかわりに、美也子は大学前の土手にのぼった。ここからグラウンドやテニスコートを見渡したり、さらに遠く繁華街の高層ビルを眺めるのが好きなのだ。グラウンドを女子学生たちが「ファイト」と調子とりながら巡っていた。テニスコートには夜間プレイ用の照明がつき男の子がダブルスの練習をしていた。一日中真面目に授業に出、坐り詰めでいたので体を思いきり動かしかった。脚や

腰の筋肉が収縮への欲望で痛いように骨を抱き締めていた。美也子が走りだそうとしたとき、前のベンチから黒い大きな塊が持ちあがった。岩でも動き出したような感じだった。長坂夏彦のおずおずとした顔がほの見えた。

「びっくりした。あら、長坂先生」

「先生はやめてください……おどかしてすみません。ええと……」

「町井美也子です」

「あなたは一年生」

「いえ、二年生です」

「そうですか、若く見える」

「よく高校生と間違えられるんです。一度新宿で飲んでたら補導されました」

彼は笑った。咽喉の底から吹きあげてくるような、聞いていて愉快になる笑い方だった。

「よく飲みに行くんですか」

「ときどきです。でもあんまり飲めないんです」

「どうです。今晚飲みませんか。ぼくと一緒によかったら」

いきなりそう言われて美也子は憤慨した。初対面といっていい女を無遠慮に誘っている、声に押し付けがましきはないけれど。が、彼女は、いま、酒など飲んでいる暇はなかった。それだけは明確にせねばならない。

「わたし、これから運動しなくちゃならないんです」

「運動……テニスか何かですか」

「いいえ」

「じゃ、ジャズダンス、自彊術^{じきやう}、アエロビクス、バレー……」

美也子は、早口に飛び出す名称がおかしかった。

「全部ちがいます。アイススケートです」

「フィギュア、ホッケー、スピード」

「フィギュアです。これでも七級なんです」

「七級とは最高の選手じゃないですか。全日本選手権に出場資格がある」

「驚いた……よく御存知ですね。スケートをやるんですか」

「いいえ、ほんの真似事だけ。ぼく、くだらない雑学に詳しいんです。とくに、スポーツのうち、体操とフィギュアスケートは見るのが大好きだから、いろいろ調べたんです」

「調べるって、本ですか」

「本も読みます。雑誌も読みます。何でも読んじゃう。ぼくの親爺なんか、お前は不消化な知識を脂肪のためにむから肥ってる、なんて言います」

どちらが先ともなく、二人は土手の上を駅の方角へ歩きだした。駅前で彼が言った。

「もう夕食の時間だな。あなた夕食どうするんですか」

「夜の運動のあとに食べます」

「ああ、お家に帰ってから。両親と一緒に」

「わたし、杉並のアパート暮らし。家族は京都にいます」

「一人暮らし……じゃぼくと同じだ」

「でも長坂さん、東京っ子でしょう」

「数年前祖父が死んでね、祖父が住んでた小石川のマンションに一人で暮している。自炊と外食の生活」

「興味あるな。男の一人暮らしって」

「つまらないですよ。朝から晩まで読書して、食って寝て、週一日精神病院で箱庭療法やって、それだけです。ねえ、きみ、こんな所で立話もなんだから、コーヒーでもどうですか」

「刺戟物は運動にさわるから厳禁」

「きびしいんだな。では、ぼくがスケート場までついていきます」

「どうぞ。でも図形の練習だから、見てもつまらないですよ」

それでも彼はついてきた。電車で二つ目の駅でおり、体育館やスタジアムの並ぶ一角にスケート場があった。貸ロッカーから靴と衣裳を取り出して美也子が身支度をすますと、貸靴をはいた長坂夏彦はもうリンクに降りて滑っていた。大きな体に似ず、敏捷な身のこなしで、一応安定して進む。前進だけしかできぬらしく、単調にリンクを二周して戻ってきた。

「上手ですね」

「いやいや、七級の人から見たらお話にならない。ぼくは勝手にやってますから、どうか練習して下さい」

丁度、整氷車^{ザンボニ}が清掃したあとで氷はなめらかだし、夕食時で空いている。美也子は中央に出で規定の図形を練習しだした。まずサークル（身長の三倍径の円）を描いてみる。これが正円になるかどうかでその日の心身の状態が推し量れる。描いた円の大きさを靴の刃を利用して測定してみても正円だと見きわめると、安心してつぎつぎに図形を描き始めた。一度練習を始める、いつもそうだが何もかも忘れてしまい、終了のベルで、はじめて長坂夏彦を思い出した。あれから三時間、とくに帰ったろうと見回すと、暖房のきいた休憩室に丸っこい姿があった。彼女が氷よりあがると彼はすぐ出てきた。

「まだいらっしゃったんですか。とっくにお帰りだと思いましたよ」

「いや、どこで読んでも同じだから本を読んでいた」

彼は葉をはさんだ厚手の本を振ってみせた。風が木々の梢をゆらして寒かった。虫の声が風音に頼りなく消された。

「それでは夕食に行きましようよ」

「それがだめなんです」美也子はきっぱりと言った。「二箇月後に東日本選手権があります。それまでに減量しなくちゃならないんです」

「だって、あなたは痩せてるじゃないですか」

「今、身長一五八センチで四八キロ、肥りすぎてジャンプがうまくいかない。四〇キロまでは減らす必要があるんです」

朝はヨーグルトと卵とトマトジュース、夕方はヨーグルトと牛肉と野菜、昼はぬき。コーチの処方による厳格な節食を守らねばならないのだ。

「そうですか」長坂夏彦は残念そうだったが、別に機嫌を損じた様子もなく、では駅まで送ると言った。が、スケート場から外へでる階段でよろけ、手摺にしがみついた。まるで酔ったみたいだ。

「いや、すみません。腹がすきすぎて、ちょっとめまいがしたもんだから」

「あらら」美也子は驚いた。スケート場にはラーメンやカレーライスの売店もあったのだ。

「いやいや、勝手に、あなたと一緒に夕食をする予定にしていたもんで、何も食べずに我慢していたんです。なにしろこの体だから、空腹はこたえます」

「まあ」美也子は言葉を失ない、つぎの瞬間、吹きだした。涙が出るほど笑ってしまった。

電車の方角が逆だった。別れぎわに彼は、不意に赤くなり額に汗を光らせて言った。

「つきまತ್ತたりして、御迷惑だったでしょう」

「いいえ」美也子の電車が先に来た。彼はいつまでも手を振っていた。

自分の部屋に戻ると、美也子は牛肉三〇〇グラムをいため、レタスをきざんだ。パンもご飯